

## 「開拓之碑」

### 静岡県富士開拓

静岡県富士宮市の朝霧高原は、富士山の西麓に位置し、標高700～1000mのところにある。ここに富士開拓農協があり、酪農を中心に約40戸が営農している。

1946（昭和51）年1月、入植してきたのは、主に長野県下伊那郡大下條村（現阿南町）の、15～25歳の若者たち130名。

今でこそ、日本有数の酪農地帯で、霊峰富士を望む観光地でもあるが、入植当初は他の開拓地に引けを取らない過酷な土地であった。

この地は、終戦まで旧陸軍少年戦車兵学校の演習地として使用されていた。ここは、地元の人々も手を出さないやせた荒地で、富士山から流れ出た溶岩の岩盤がむき出しになっていて、「穀物は実らず、葉物は茂らず、根物は太らず」の時期が続いた。特に厳しかったのは、川が無いので水が手に入らず、屋根に降った雨を溜めてしのぐこともあった。

伸び盛りの若者達の栄養状態はひどくなり、3班に分けて交代で故郷に帰って体力を回復させることにした。西富士にもう戻ってこないのではないかという心配をよそに、皆元気になって戻ってきて団結が深まった。

開拓団には金が無かったので、自分たちで何でも作れるように、製塩部、製炭部、輸送部などを作り、開墾の他に別の仕事も分担して助け合った。

54年によりやく国から高度集約酪農地域の指定を受けて、酪農が本格的に始まった。しかしまだ牛舎は無く、野草地での放牧が主体であった。この頃から個人住宅の建設も始まり、個人経営に移行していった。

65年土地改良事業等により大規模な草地改良が行われ、飼料基盤の整備や新しい施設の建設が進み、現在の酪農地域としての基盤が確立された。

右の碑は、当農協が76年11月、富士宮市人穴の西富士霊園内に、開拓30周年を記念して建立したもので、碑銘は「開拓之碑」。富士山と共に、今も続いている酪農大国を見守っている。

『霊峰富士を仰ぎ、南に駿河の海を望むこの地。ここに永住の地を求め、新天地を開拓せんと大志を抱き、三百余戸一団となり、昭和二十一年一月入植せり。

この地もと北部六ヶ村の入会秣場なりしが、その後陸軍の演習場となり戦後解放されて開拓地となりしものなり。』

## 富士開拓 「開拓之碑」

- ①調査日 2017年1月18日
- ②所在 静岡県富士宮市人穴
- ③地区の沿革 陸軍少年戦車兵学校の演習地が1946年の緊急開拓事業で国営の開拓地として自作農家創設事業が開始され、長野県阿南町を中心とした15～20歳の青年が分村計画に則り集団入植。国営事業を中核に開墾作業を共同生活で実施した時代であり、食料増産中心の農業を行うが「穀物は実らず、葉物は茂らず、根物は太らず」の厳しい時代である。畜産農家への転換を目指し、54年に国からジャージー牛250頭余りが導入され、酪農地帯としての第一歩を踏み出す。65年には大規模な草地の改良、飼糧基盤の整備や新しい施設の建設が進み、より生産性の高いホルスタイン種への移行と相まって現在の酪農地域としての基盤が確立される。この時期から経営の拡大を志向する農家が増加した半面、小規模農家の離農も目立ち始めた時代であった。80年代には国の事業で草地や施設の整備、高性能の大型機械の導入を行い酪農地域として名実共に発展した。
- ④設置年月日 昭和51年11月
- ⑤設置者 富士開拓農業協同組合
- ⑥碑名 入植30周年記念碑
- ⑦碑文（表面） 開拓之碑
- ⑧副碑（表面） 霊峰富士を仰ぎ 南に駿河の海を望むこの地 ここに永住の地を求め新天地を開拓せんと大志を抱き 三百余戸一団となり 昭和二十一年一月入植せり この地もと北部六ヶ村の入会秣場なりしがその後陸軍の演習場となり戦後開放されて開拓地となりしものなり 元来地力弱く高冷地なれば不毛の原野として顧みざりし土地への入植に対し村人はひそかに事業の成功に危惧の念を抱けり入植当時は物資窮乏の折にて 開拓者の生活は筆舌に尽し難き苦難の連続にして 遂に前途に希望を捨て離脱する者さえ出でたり 然し踏止どまる者よくこの苦難に耐え 悪条件を克服し 次第に成果を挙げ 今や富士西麓の酪農は日本全国にその名聲を高むるに至れり 苦節三十年過ぎし苦難の道を顧み悲喜交々誠に感に堪えざるものあり 一同にここに碑を建ていささか由来を記し三十周年を記念する
- 昭和五十一年十一月吉日
- 富士開拓農業協同組合
- ⑨現在の状況 西富士霊園内で管理されている。





前記以外に、西富士長野開拓団による「開拓記念像」と「富士を仰いで」の碑が建立されている。





## 富士を仰いで

国破れて山河あり。昭和二十年八月十五日日本は太平洋戦争に敗れた。  
この日わがふる里伊那谷は古い衣を脱ぎすてた。

昭和二十一年一月三十日西富士長野開拓団の第一陣七十三名は、村の道をふみしめ国鉄飯田線温田駅に集まった。寒冷は身にしみたが旅立ちにふさわしい晴朗の朝だった。ここ東海の天に「峨々タル精骨」として屹立する霊峰はわれらをしっかり抱きよせてくれた。その日から三十二年長野県下伊那郡大下條村助役伊藤義実を団長とする一九九名は朝な夕な富士を仰ぎ豊かな精算と高い文化の村づくりをめざしひたぶるにただひたぶるに歩みつづけた夫と妻は肩を組み、子らを背負うてのながい道のりであった。今初志は貫徹されようとしている子らはわれらを越えてあたらしい牛飼いの道を歩きはじめた。

富士は、今日も、明日も、西富士長野開拓団の道しるべとして、ここに聳える。

一九七九年十一月三日

西富士長野開拓団

更に、近くには子供達に宛てた詩が刻まれた石が建立されている。また「ふるさとの森」と題した富士宮地区長野県人会による四十周年記念碑も建立されている。



子等よ/ここが故郷だ/涙がこぼれたら/不二を仰げ/子等よ/あのさきがけの/魂が/ここに宿る



ふるさとの森

昭和六十一年四月植樹  
富士宮地区長野県人会  
四十周年記念碑

平成十八年四月吉日建立